

朗 読 文

酒店の棚に酒の瓶がずらっと並んでいるのを見るのが、僕は好きだ。商品のパッケージ全般が、僕は子供の頃から好きだった。酒瓶もパッケージの一種だから、酒瓶を見るのが好きだという傾向は、自分でもよく納得がいく。世界各国のさまざまな酒を、何百種類と揃えている酒店が最近は多く、そのような店にたまたま入ると、僕はすべてを見て歩く。

どれもみなおいしそうだと、酒瓶を眺めながら思う。ラベルに印刷してある文字を読んで感心したりする。酒店で瓶を観察しているだけで、僕は酒に関しては完全に満足だ。飲みたいという気持ちは起こらないが、好奇心は抑えがたいから、僕は酒瓶をときたま買う。酒を買うのではなく、酒の入った酒瓶というパッケージを買う。思わず買ってしまいたくなるほどによくできた酒瓶というものが、世界中に数多くあるのだ。

僕はほとんど酒を飲まないけれど、どんな味なのか、どんな香りなのか知りたいという好奇心は人一倍ある。だから、飲むわけではない酒を買い、パッケージを細かく観察したあと、封を切ってほんの少しだけグラスに注ぎ、味と香りを確認してみる。こんなふうにしてひと口だけ試してみた世界各国の酒が、いつのまにかたくさんたまる。幸いにして酒の好きな友人が何人もいるから、彼らに引き取ってもらっている。酒飲みの目から見ると、支離滅裂な取り合わせだから、引き取ってくれる友人たちは誰もが一樣に不思議がついている。なぜこんなにさまざまな酒が、しかも一本ずつあるのか、事情を説明されないことには誰にもわからない。

酒瓶を眺めるのが好き。ひと口ずつ味わってみるのが好き。ひと口だけ飲んでみた世界各国の酒を友人に進呈しんていするのが好き、という僕は酒が嫌いなわけではないし、ほんの少しなら飲むけれど、いわゆる酒を飲む人ではないようだ。酒は僕の体質に合っていない。酒を飲むと、自分にとっては必要のない余計なものが体の中に入って来たという感覚を、心理的にだけではなく生理的にも受けとめる。いったん入ってしまうと、ささやかなほろ酔いにしろ、とにかく酔いがまわる。その酔いが覚めるのをじっと待って、ようやく体のなかに入った余計なものと別れることができる。

いろんな酒をひと口だけ飲んできた僕のひとまずの結論は、どの酒も、それが生まれた現地で飲むといい、という明らかに平凡なものだ。絶対にそうすべきだ、とは言わないけれど、現地で飲むならその酒に関する理解や体験は、はるかに総合的に具体的に、その全体に及ぶはずだ。日本酒に地酒がいくつもあり、酒はそもそも地酒であることを考えるなら、それぞれの酒が生まれた土地は、どの酒にとっても重要な意味を持っている。だから、これまでにひと口ずつ飲んださまざまな酒を、同じくひと口でいいから、それぞれの現地で飲んでみたいと僕は思い始めている。